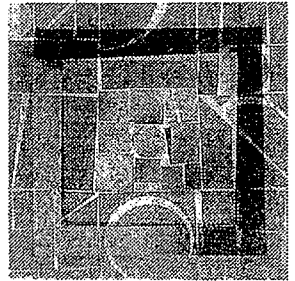


文化

肉体で詠む「奥の細道」

◇俳句のイメージをパントマイムで表現する◇

藤倉健雄 (カンジヤマ・マイム)



堂本元次「意識の展開」  
〔日本画の抽象〕展から

「簡潔さは機知の精髓」  
簡潔さのなかに凝縮された深み。フランスが世界に誇る現代

マイムの第一人者マルセル・マルソの舞台を垣間見たことからすべてが始まった。演目は「青年、壮年、老人、死」。せりふを使わずに、しかも生身の身体一つで人間の一生を数分にして演じ切った。そしてこの数分間の演技が、舞台上に無縁な当時十七歳の学生であった私のその後的人生を決定づけてしまったのである。彼を目撃したことに

より私は現在、自らパントマイムとして舞台上に立っている。

パントマイム？パントマイム？パートタイム？日本ではその呼称すらいまだに誤解されかねないこの芸術の名は、古代ギリシア語由来で、パントス(すべて)をミーモス(模倣)するという意味がある。ここから発展してすべての物、森羅万象のエッセンスを凝縮し、身体による簡潔表現に昇華するのがパントマイムである。

「簡潔さは機知の精髓である」これはシェークスピアの「ハムレット」の中の一節だ。マルソとの出会い以来、「パントマイムのだいいち味を一言で」と聞かれたら、私はいつもこの言葉を引用している。

◇◇◇  
永六輔さんのすすめで私は妻と二人で構成するカンジヤマ・マイムでこのようなマイムを追求してきた。二人の米

国の師匠であり、マルソのまな弟子のトニー・モンタナロ氏が「感じる」ことが「山」のように盛り上がったマイムという意味で命をくれた。

俳句というまさに五七五の簡潔さのなかにすべてを凝縮した「言葉のパントマイム」に出会ったのは、永六輔さんのおかげであった。永さんの旅に「一緒させて頂いた折、何気なく「山頭火をマイムにしてみないか？」というアドバイスを頂き、幾つかの句をマイムの動きにしたのが俳句マイムの始まりであった。

その後、山梨県中畠町の「句碑の里」という日本全国の俳句ファンの自作の句を句碑にするというボランティアの集いに幾度となく招待を受け、一般の方々の俳句をマイムにしたのが好評だった。そして、いよいよ松尾芭蕉の「奥の細道」に挑むことになった。

◇◇◇  
このように経過を辿ると簡

単だが、俳句マイムの道は楽ではなかった。カンジヤマ・マイムは、俳句は全くの素人。また、芭の未熟さもあった。俳句マイムをするには生身の身体表現がいかに限られるものか、思い知らされる毎日であった。

俳句マイムとはどんなものか、最近作つたものを例に紹介しよう。例えば中畠町の句碑の里には、永さんの「寝返りをうてば土籠(つく)く」は「目の高さ」という句がある。寝転んでいて寝返りを打つと土籠が目前にある……。これではただの当て振りである。実をいうとこの句は簡潔すぎてかえって難しく避けていたのだが、テレビ番組で中畠町の特集があった際、半ば無理やり作らねばならない羽目になってしまったのだ。

◇◇◇  
すべては無から創造  
七転八倒の末、思い付いたのが「寝返りをうつ」〓知らぬ間に「土籠は目の高さ」〓季節節

時間の経過、とらうことであつた。そしてこの句の解決のヒントになったのが、永さん作詞の「坊や」という曲を、偶然ラジオで耳にしたことであつた。

結果はこうである。親子が草原に散歩にくる。子供が父の手を振り抜け、草原で戯れている間に父親はウトウトと居眠りをしてしまう。子供は草原の中に土筆を見つけ、それをつかもうとした瞬間に土筆そのものになりムクムクと成長する。やがて父親が寝返りをうち、わが子に目をやるとその子は知らぬ間にすでに自分の目の高さまで成長している。やがて老いた父親は今度はその子に手を引かれ歩み出す。

これはあくまで私たちの創作であり、原句の意図とは関係ない。俳句マイムの創作とは、五七五に凝縮されたエッセンスの選り、再凝縮作業なのである。ただし、これはうまくいったほんの一例であり、いつもこの

ようにスムーズに行くとは限らない。奥の細道に「ても同様で例えは「夏くさや兵どもが夢の跡」の「夢の跡」とはどのような表現にした方がいいのだろうか？あるいは「あかあかと日は難面(つれなく)もあきの風」の「あきの風」とは？こんなカベに絶えずぶち当たった。

ただ、このカベと朝な夕な格闘し続けるうち、ある日突然、それこそ啓示のような解決の光が差すことがある。そしてそれは、先の例のようにラジオを聞いている時とか、湯船の中とか、全く予期しない時に突然や

つてくることが多い。俳句マイム創造の難さとはこの啓示の光を偶然に手に入れるまで、いかに執拗に動作やイメージとの悪戦苦闘に耐えられるかということかも知れない。マイムという芸術には能く歌舞伎などの伝統芸能に見られるような「便利な」約束事も、様式化された動きもないのである。すべて無から創造されなければならぬのだ。

◇◇◇  
「語り」蓄積に役立つ  
山頭火から入ってよかったと思う。自由律の自由奔放な作風は、私たちのような全くの素人に、原作の意図にとらわれず、自由に発想を転換することを教えてくれたような気がする。そのうえ、山頭火には情景描写だけでもおもしろ

いものが沢山あつた。おそらく永さんはこのことを承知で私たちに山頭火をすすめて下さったのだと思ふ。この情景描写を視覚化するとは、私たちの俳句マイムの動きのボキャブラリー(語り)を蓄積するのに大いに役立つ。そして何よりもその中で、季節を動きにするコツを少々会得できたということだ。例えば「あきの風」を表すには、そのまま秋風を忠実に表現しようとする必要はない。トンボなどが風に乘って飛んで行く様子を、具体的に描写したほうが視覚的には分かりやすい。これは言ってみれば、季節に対して「季節」とでも呼んだものであるか。もちろん、これも私たちの勝手な解釈であり、かの芭蕉翁が「魔になつたら、怒りのあまり卒倒してしまふかも知れない。悪戦苦闘は現在も続いており、いまだ解決できない句は山ある。いや解決できた句はほ

んの一握りだ。こんな未熟な私たちが、幸いにも「遠くへ行きたい」というテレビの旅番組に出演する機会に恵まれた。芭蕉の足跡をたどって俳句をマイムにして旅をする。芭蕉の句の理解を深めることができる。一日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり……。思えば、二十年近く前にマイムの魔力に魅せられてしまった私は、その隣人から知らず知らずのうちにこの「機知の精髓」を求めてきたらう、生涯の旅人になってしまったのかも知れない。そしてこの完成することのない旅は、まだまだ始まったばかり。私たちカンジヤマ・マイムは若輩を省みず、日本で初のパントマイムの入門書「おしゃべりなパントマイム」を今月出版する。後から来るであろう、より優れた旅人たちの道標になればと念じている。(おじくら・たけおカンジヤマ、パントマイムリスト)

